未成年の妊娠に関する研究

松嶺　宰（生涯スポーツ学科　学校スポーツコース）
指導教員　中薗　伸二

キーワード：未成年の妊娠問題　人工妊娠中絶　性教育

１．緒言

現在、未成年の妊娠や人工妊娠中絶の割合は、やや減ってきてはいるが、人数を見ても決して少ないほうではない。性教育の授業を通し、知識は身に付くものの、一番大切となる「いのちの重さを考える」という部分が重く置かれていないのではないのだろうか。思春期ということもあり、子どもたちは恥ずかしさが強く出てしまい、知識だけを学ばせようとしても、実際に関心を持って授業に取り組めているのかどうなのかが疑問である。

そこで、保健の授業は、知識だけを学ばせるのではなく、自分自身で考える授業を展開していくことが重要である。自分自身の考えや意見を述べる場を作ったり、問題形式にして生徒の関心を持たせたり、教師側からも子どもたちが深く考えられる環境（授業）を提供することが大切になると考える。

２．研究方法

未成年の妊娠や人工妊娠中絶の割合、望まれない妊娠などの文献データを用い、未成年の妊娠問題には、学校での性教育やいのちの教育が重要であることを示す。また、授業展開によって、その問題を減少させることができることについて論じる。

中学校の保健の教科書全 3 冊などの記述内容の分析結果なども踏まえ、いのちの重さを考えることにつなげようとする「授業書」も作成し、様々な視点から性教育のあり方を考える。「授業書」には、写真や事例により、協同的に考える問題とその正解などのお話を盛り込む。

３．結果と考察

2001 年をピークに現在は減少傾向に見られる未成年の人工妊娠中絶だが、決して少なくはない。中学校の保健の教科書にも、男女の体のしくみやいのちの誕生の仕方について記載されている。しかし、主な避妊方法や人工妊娠中絶については記載されておらず、それらの確かな知識を学ばせる授業が行われていない。インターネットや携帯電話が当たり前のように普及し、不確かな性に関する情報などが飛び交っている今日、性教育で確かな知識や考える力を身につけさせなければいけない。

生徒が考える授業をするために、問題形式での「授業書」を作成した。「いのち」について深く考えさせる授業展開をし、生徒自身に思考力・判断力も身につけさせることが大事である。

４．まとめ

時代が変わるにつれて生徒一人ひとりの性についての考え方も変わり、またそれに伴って、教師もその時代にあった指導をしなくてはいけないが、性教育の根底であるいのちの重さやいのちの大切さについてだけは、いつの時代もぶれることなく伝えていかなければならない。そのために、問題形式での「授業書」としての教材を写真、事例などを盛り込んで作成した。

参考文献

岩室紳也（2008）思春期の性　いま、何を、どう伝えるか．大修館書店.
レナート・ニルソン等（2006）おなかの赤ちゃん．講談社.